

2018年7月1日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「わたしが示す地に行きなさい」

聖書：創世記12:1～9

アブラハムは、「信仰の父」と呼ばれるが、しかし決して理想的な信仰者であるとか、人間性が立派であるということでもない。この物語で注目したい事は、先ず神の御声に聞くと言うこと。そしてこの物語の中で、神が人々のありようを超えて、平和をもたらそうとされるお方であることに心留めて行きたい。

アブラハムの旅とは、私たちに何を問うのか？ 主はアブラハムに語る。「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい」と。彼はこの言葉を聞いた時、住み慣れたハランの町を出て旅立ったのである。信仰とは、神の言葉を聞いてそれに従うことにある。御言葉を聞いても、それに従わない者には信仰の世界は始まらない。ここは、神に聞き従う人生という旅のあり方を示しているように思う。私たち一人ひとりの信仰の旅。ただ、「信仰の父」と称されるアブラハムもまた決して誤りのない賞賛される信仰者とは言いがたく、「迷いと失敗」を繰り返す。当初、「主の言葉に従って旅立った」が、現実の厳しさゆえに主の示す道ではなく、自らの道を歩みだしてしまう。

ここに一つの疑問が出てくる。何故神は、すでにカナン人が住んでいる「この土地を与える」というのか？ この聖書の記述が、今現在のイスラエルの入植、パレスチナ問題である。神は「この土地を与える」という時に、その約束の地が誰も住んでいない、自由に使える、豊かな、パラダイスのような所を「与えた」のではなかった。アブラハムに与えられたのは、すでに住んでいるカナン人との只中に置かれるということ。大多数のカナン人に対して、少数的立場に、神は彼を立たせて行こうとされている。カナン人との関係性へと招かれている。ここをそのように見て行く時、聖書の新たな視点が生まれて来るかと思う。

しかしアブラムは、すでに住んでいるカナン人と向き合うことを避けた。主なる神は、カナン人からこの土地を奪えとか、争え、という事は言っていない。アブラハムが神の問いに気づくには、もうしばらくかかるようだ。

私たちもまた、「迷いと失敗」を犯しやすい。しかし主の御手は、アブラハムを離さなかった。主の御手の中で、「迷いと失敗」を繰り返し、主の忍耐と寛容さの中で、彼は成長させられたと言える。そのアブラハムを離さなかった神は、私たちをも離さないのである。(神谷)